

<文献紹介>佐藤典人 著 『自然地理学(気候・気象)』

NAKAYAMA, Hideaki / 中山, 秀晃

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

2016-03-18

【文献紹介】

佐藤 典人 著 (2015年3月)

「自然地理学 (気候・気象)」, 法政大学通信教育部, 468p

「気候・気象学」の講義を55年館の522教室で拝聴したのは、かれこれ30年以上も前のことである。当時、地理学科の学生だった私としては、最も熱心に受講した科目であったと記憶している。毎週、書き写したノートは、今でも大切に保存してある。学生の間では、「数式が沢山でてきて難しく、授業も厳しい」ともっばらのウワサだったのだが、それだけに、どんな内容が展開されるのか興味津々で初回の講義を受けたのを覚えている。

「気象学は入りやすいが奥が深い学問である」とは、気象予報士受験のバイブルともいえる「一般気象学」(小倉義光著)の序章からの引用であるが、この「気象学」という部分を、「気候学」に置き換えても、文意に大差はあるまい。今でもノートを開くと講義を受けた当時の、ある種の興奮が蘇ってくる。そんな佐藤先生の「気候・気象学」が通信教育部の教科書として発行された。気候学、気象学に少しでも興味をもたれた方は、手にとってじっくりと読み進めてほしい。難しいところは、何回も読み返して理解したい。

本書の構成は以下のとおりである。

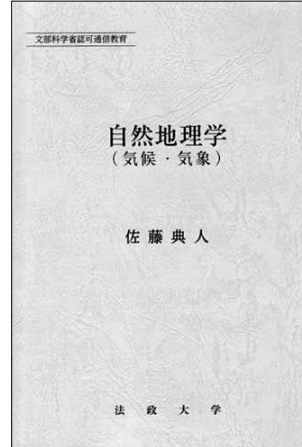
はじめに

- 第1章 大気地理学〔気候・気象〕を学ぶに臨み
- 第2章 大気現象の理解を前にして
- 第3章 大気現象を構成する要素と因子
- 第4章 気温と気圧を考える
- 第5章 なぜ雲が湧いて降水が落ちてくるのか?
- 第6章 どうすれば大気の動きを捉えられるのか?
- 第7章 大気の団体とその狭間
- 第8章 高層風の波動と下層の大気現象との対応
- 第9章 地球規模の大気の循環を考える
- 第10章 気候の分類とその分布領域
- 第11章 過去の気候と気候の変化
- 第12章 今日の大気環境問題を巡る三役

おわりに

本文に加えて、各章には学習に疲れたときの一服の清涼剤として気候・気象にまつわる16の閑話が挿入されている。巻末には専門書の文献案内と索引、著者紹介があり、辞書的な活用や、さらに内容を深めたい場合の手引き書としての利用もでき、丁寧な作りとなっている。

本書の読み進め方であるが、気候・気象学についてある程度の素養のある人は、興味があるところから1章ずつ読み進めることができるだろう。この分野について初めて学ぶ場合は、第1章からゆっくりと学習す



るのが良い。気象分野の内容になると、どうしても物理量や数式が出てくるので、慣れない方には難しく感じるだろう。その場合は、文献案内にある気象学の入門書や高校地学、物理などの教科書、さらには気象予報士受験テキストなどを使って、基礎から学習してみることをお勧めする。特に物理量の単位の理解は必須である。

一方、気候学の内容については、気象分野に比べるとスムーズに読みこなせるのではないかと。第10章は、高校地理で苦労した覚えのある気候区分についての内容である。「ケッペンの気候区分とその成立背景」, 「ケッペンの分類とは着想の違う発生的気候分類とは何か」など、気候を分類し、気候地域を設定することの地理学的意味が丁寧に記述されている。読む人によっては、これまでの理解で引っかかっていた部分が氷解し、目から鱗が落ちることになるのではないかと。気候分類は、古典から最新の研究まで、奥の深いテーマである。

さて、「できる限り数値を用いず、何とか文系学生にも理解しやすい講義はできないものか?」という先生の執筆目標は、達成されたのであろうか。私などは、「大学の教科書は、ある程度難しい方がよい」と思ってしまうのだが、これは30年前に本書を手にするのでできなかった元学生の僻みの類いであろうか。是非、一読をお勧めしたい。

なお、購入希望者は著者(メールアドレス: norihito@hosei.ac.jp)まで連絡をしていただきたい。

(中山秀晃)